

家族と仕事と、そして私

端本 宇志

防衛医科大学校皮膚科学講座准教授

わたくしは2004年に医師となりました。そのころの世相は決して明るいものではありませんでした。社会はバブル崩壊後の不景気が尾を引いており、就職氷河期と呼ばれる就職難で若者は皆苦しんでいました。そのような中で、幸運にも医師という「手に職」をつけられる仕事をいただけた自分はなんと幸せだろう、と思いました。そのような背景から、あるいは当時の医療業界のムードもあったでしょう、滅私奉公で仕事をするのがあたり前でした。上司からの業務依頼（という名の命令）には「ハイ」か「イエス」でしか返答できず、土日祝日であっても患者最優先。夜間自宅にいても即時体制で、受け持ち患者がいる限りは病棟に居ない日はありえず、ほかの医師に診察・処置の代わりに頼むと怒られました。でも、それは本当に正しかったのでしょうか？

もちろん成長は最終的には自分で掴み取るしかありません。修練した時間に比例して皮膚科医として成長する。とはいえ、私生活を犠牲にした根性論が必要であるとは思いません。当時のわたくしは（あるいは多くの医師が）不条理を感じ、さりとてそれをいい出せず、ささやかな抵抗として「三步下がって師の影を踏みにじる」くらいしかできませんでした（冗談です）。

その当時から20年経ちました。世の思想も医療の構造も移ろいゆきます。ワークライフバランスという言葉が世に浸透し、医師の働き方改革（革命？）も始まります。過去は修正できませんが、新たな道を切り拓くことはできます。職業人の倫理として専門を真摯に学び努力することは当然ですが、無駄な努力は徒労であり有害です。根性論を排除して効率よく学び、医療以外にも目を向け、自らの感性を涵養し、家族を毎日抱きしめる余裕をもてるようになる。そのような時代をつくれるとわたくしは希望を持っています。では、その礎となるものは？ それは「人」であり「システム」だと思います。

自分が正しい道筋にいるかはすぐにはわからず、振り返る段になって寄り道であった、



と気づくことも多いでしょう。他方で、切磋琢磨する同僚や大所高所から導いてくださる上司がいれば、正しい道が拓けて効率のよい仕事や学びができ、生活への余裕がもたらされます。辛いときに助け合えるのも、そのような多種多様な人がいるからこそです。このようなシステムを作成して利用し、そして維持していく。このことがワークライフバランス実現への1つの解だと思います。批判は多いものの、医局は（使いようによっては）優れたシステムである、わたくしはそう考えます。

わたくしのいる医局はどうでしょう？ 尊敬すべき上司や優秀で心優しい同僚たちはまさに、曇天に切り開かれた青空となる「大家族」といえましょう。彼らとともに協調することで仕事を上手くこなして皮膚科医として成長するとともに（これは多分に願望が入っています）、休日には愛する妻や可愛い子どもたちを抱きしめ公園に遊びに行き、好きな音楽（Hiromiからレキシ、BachからOrff、Mayuzumiまで）やオペラ、ミュージカルを楽しみ自己を涵養する、そのような日々が実現しつつあります。わたくしが愛してやまない家族と、楽しく一緒に働いてくれる「大家族」には、心からの感謝とともに熱く抱擁したい気持ちでいっぱいです。